

①「刹那（せつな）」

日本のアニメーションは大人も子供も好きな方が多く、世界的にも有名です。その中には、仏教やインド由来の言葉が使われていることがあります。

三十五年を超えて次々と新作が放送されているロボットアニメにも、お釈迦さまの教えを表す「アーガマ」や、インドの聖典<sup>せいてん</sup>という意味の「ヴェーダ」という言葉が使われています。

そしてその作品には「刹那<sup>せつな</sup>」という名前の主人公が登場します。

この「刹那」とは時間の単位です。辞典には、「最小限の時間、瞬間」とあります。古いインドの言葉で「クシャナ」といい、中国では、「念<sup>ねん</sup>」と訳されました。最小の時間の単位と言われても良く分からないかもしれませんが、ある文献には七十五分の一秒という記述があります。この短い間に、私たち自身を含めたすべての物事は生き死に<sup>く</sup>を繰り返し変化しているという仏教の考え方があります。およそ二千年五百年前から仏教では、時間の考え方を研究していたことに驚きを感じます。

昔のアニメーションはセル画という薄い透明なフィルム一枚一枚に絵を書いてひとつの作品を作っていました。その一枚を「刹那<sup>とら</sup>」と捉え、この積み重ねによって作品が出来上がっていたことを考えると、アニメーションひとつにしてもたくさんの念<sup>ねん</sup>、想<sup>おも</sup>いが詰まっているといえるでしょう。

②「退屈（たいくつ）」

梅雨<sup>つゆ</sup>の季節が目の前に迫っています。長い雨は、農作物<sup>のうさくぶつ</sup>にとっては無くてはならない恵みの雨<sup>めぐ</sup>でも、せっかくの休日に出かけられずに退屈<sup>たいくつ</sup>をしてしまうこともあるでしょう。実はこの「退屈」も仏教から来た言葉です。

辞典によりますと「退屈」とは、仏教の教えを求める心が退き、くじけ、尻込み<sup>しりご</sup>をすることとあります。一般的には、何もすることが思いつかなく、なんとなく時間ばかりが過ぎる、そのような状態ではないでしょうか。

大本山永平寺を開かれた道元<sup>えいへいじ</sup>禅師<sup>どうげん</sup>は、「私たちはいずれ死ぬ存在であるから、時間をいい加減に使って無駄に過ごさず、それぞれの人が一生懸命に過ごすことを大切にしてください。」とお示しになっています。

## 『 禅のころろ - 曹洞宗 - 』

退屈になったとき、自分自身を鑑<sup>かんが</sup>みて、自分のため他人<sup>ひと</sup>のために何かできることはないかを考え、実行してみることが「退屈」から抜け出る大切な修行となるでしょう。

— 終 —